広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | モンゴル語の移動動詞 : 経路とその格標示 |
| Author(s) | 佐藤, 暢治 |
| Citation | ニダバ , 26 : 59 - 68 |
| Issue Date | 1997-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048014 |
| Right | |
| Relation | |

論　文

# モンゴル語の移動動詞

## ― 経路とその格標示 ―

佐　藤　暢　治

## 0．はじめに

移動動詞というのは，意味的には起点(どこから)を指向する動詞，経路(どこを通って)を指向する動詞，到達点(どこに)を指向する動詞の3つに分けることができる。本稿では，これらを各々起点指向性移動動詞，経路指向性移動動詞，到達点指向性移動動詞と呼ぶことにしよう。

モンゴル語の移動動詞の研究は必ずしも多くないが，日本語の「行く」に対応する2つの到達点指向性移動動詞 яв- と оч- の違いはしばしば文法書のなかで取り上げられている。これら2つの動詞の意味上の違いは，橋本・谷(1993：83)が述べる通り[1]，前者が方向だけで到着したかどうか表さないのに対し，後者は到達点を表すといった点に求められる。モンゴル語学に新たな術語を導入すれば，目標性(telicity)の違いということになる((1)(2)は，橋本・谷(1993)を一部改めた)。

(1)　Би　Осака　(руу)　явлаа.
　　私　大阪　方向格　行った(向かった)
　　「私は大阪へ行った(向かった)」

(2)　Би　Осака-д　очлоо.
　　私　大阪-与位格　行った(着いた)
　　「私は大阪に行った(着いた)」

移動動詞の経路を到達点までの通り道とすれば，その表し方には，動詞の意味分析，格認識，他動性など様々な問題が関わり，一般言語学的にも興味深いものがある。しかし，移動動詞の経路がモンゴル語の研究のなかで論じられたことは今までのところないようである。経路は，移動動詞において経路指向性移動動詞だけでなく，到達点指向性移動動詞や起点指向性移動動詞でも表されるが，モンゴル語の経路の表し方は一定ではない。

本稿は，以上のような観点から，モンゴル語の移動動詞に焦点をあて経路とその格標示

を検討する。第1節では，モンゴル語の移動動詞が，起点，到達点，経路をどのように表すのかスケッチし，経路指向性移動動詞には語義のなかに経路を含むものと含まないものとがあることを述べる。第2節では，モンゴル語の経路指向性移動動詞の語義のなかに含まれる経路というのは全面的な移動であり，この場合動詞は名詞と対格を介して結びつくが，語義のなかに経路を含まない経路指向性移動動詞は，経路を表す格として造格か与位格を取るという実情を記述する。第3節では，モンゴル語の到達点指向性移動動詞と経路指向性移動動詞が経路をどのように表すのかを述べる。そして，第4節では前節までに述べてきた格の現れを他動性及び認識の観点から述べる。

## 1．起点・到達点・経路のスケッチ

この節では，モンゴル語の移動動詞が，起点，到達点，経路をどのように表すのかスケッチし，経路の表し方の特徴とその問題点を指摘する。スケッチの方法として，起点の例は起点指向性移動動詞から取り上げ，到達点の例は到達点指向性移動動詞から，そして経路の例は経路指向性移動動詞から取り上げる。注目点は，経路が経路指向性移動動詞の語義のなかに含まれる場合もあれば，そうでない場合もあるという点である。

まずは，起点を起点指向性移動動詞からみていこう。起点指向性移動動詞として，гар-「出る」や буу-「下りる」をあげることができる。(3)(4)のように，これらの動詞は起点として奪格を取り，語義のなかに起点を取り込むことはない。

(3) Би хот-оос гарна.
私 町-奪格 出る
「私は町から出る」

(4) Би уулн-аас бууна.
私 山-奪格 下りる
「私は山から下りる」

次に，到達点を到達点指向性移動動詞からみることにする。到達点指向性移動動詞として，ир-「来る」や оч-「行く」をあげることができる。(5)(6)のように，これらの動詞は到達点として与位格を取り，語義のなかに到達点を取り込むことはない。

(5) Тэр ирэх жил Япон-д ирэх гэнэ.
彼 来年 日本-与位格 来る そうだ
「彼が来年日本に来るそうだ」

(6)　Би　Япон-д　очно.
私　日本-与位格　行く
「私は日本に行く」

ただし，яв-「行く(出かける)」は，到達することを含まない非目標性動詞(atelic verb)であるため，(1)のように与位格は取らず，格を取るなら方向格となる。これは，яв-が語義のなかに方向を含むことを示している。

一方，経路指向性移動動詞の状況は，起点指向性あるいは到達点指向性移動動詞のそれとは随分異なる。(7)では，гатал-「渡る」という経路指向性移動動詞が名詞と対格を介して結びついている。

(7)　Би　Сэлэнгэ　мөрн-ийг　гатална.
私　セレンゲ　河-対格　渡る
「私はセレンゲ河を渡る」

(7)の対格は経路を表すのではなく，経路は動詞の語義のなかに含まれていると見なければならない。(8)は，(7)と同じ動詞が不定格を取っている例であるが，このような例は(7)の対格が経路を表すのではなく，動詞のなかに経路が含まれることを示す例と言える。そのために，不定格を取る(8)が非文ではないのである。

(8)　Би　мөрөн- ϕ　гатална.
私　河-不定格　渡る
「私は(ある)河を渡る」

とは言え，経路指向性移動動詞の語義のなかに，経路が常に含まれているとみるのも適切ではない。(9)では гүй-「走る」という動詞が名詞と造格を介して結びついているが，この動詞は(10)のように不定格とは結びつかず，造格は確かに経路を表している。そして，この造格には造格が本来もつ造具の要素はかなり乏しく，造格が用いられることに不思議な感じがするかもしれない。この点は，後に述べることにしよう。

(9)　Би　энэ　зам-аар　гүйнэ.
私　この　道-造格　走る
「私はこの道を走る」

(10)　*Би　энэ　зам-φ　гүйнэ.
私　この　道-不定格　走る
「私はこの道を走る」

従って，(7)の гатал-「渡る」は語義のなかに経路を含んだ経路指向性移動動詞であるが，(9)の гүй-「走る」は語義のなかに経路を含んでいない経路指向性移動動詞ということになる。では，経路指向性移動動詞が経路を含み，名詞と対格を介して結ぶつくかどうかの分岐点はどこにあるのであろうか。また，ここでいう経路とは具体的にどういう経路であろうか。通り道なら何でもよいというのではなさそうである。

## 2．経路指向性動詞の経路 －全面的な移動を含むかどうか－

経路指向性移動動詞の例として，前節では(7)に гатал-「渡る」を取り上げ，(9)に гүй-「走る」を取り上げた。これら2つの動詞の違いは，動詞自身が移動した空間を明確に表せるかどうかという点にある。гатал-「渡る」は通過を表す動詞であり移動した範囲を推し量れるが，гүй-「走る」は移動の様態を表す動詞でありどの程度移動したのか推し量れない。ただし，経路指向性移動動詞の一部が語義のなかに含む経路を通過とする見方は十分ではない。гатал-「渡る」と並んで(11)-(13)のような туул-「通り抜ける」，өнгөр-「通り過ぎる」，дав-「越える」といった一連の通過動詞に加え，

(11)　Би　туннелийг　тууллаа.
私　トンネル-対格　通り抜けた
「私はトンネルを通り抜けた」

(12)　Би　банк-ыг　өнгөрлөө.
私　銀行-対格　通り過ぎた
「私は銀行を通り過ぎた」

(13)　Би　Алтай　нуруу-г　давлаа.
私　アルタイ山脈-対格　越えた
「私はアルタイ山脈を越えた」

(14)(15)のように外周の全面移動を表す тойр-「曲がる，廻る」も経路を含む動詞に含まれる。

(14)　Би　замын　булан-г　тойрлоо.
私　道の角-対格　曲がった

「私は道の角を曲がった」

(15) Би Улаанбаатар-ыг тойрлоо.
私 ウランバートル-対格 廻った
「私はウランバートルを一周した」

従って，経路指向性移動動詞の語義のなかに含まれる経路というのは経路の全面的な移動ということになるであろう。そして，経路指向性移動動詞のなかで，そのような語義を含んでいない動詞が対格ではなく，造格あるいは与位格を取ることになるのであるが，以下でこの点を確認していこう。

語義のなかに経路を含まない経路指向性移動動詞には，移動様態を表す動詞や旅行を表す動詞がある。経路は造格か与位格で表されるが，造格は道具的な要素を幾分か残しながらも漠然とした空間を表し，与位格は限定された空間を表す。まず，(16)－(18)に移動様態を表す гүй-「走る」，алха-「歩く」，мөлхө-「這う」を掲げよう。(16a)(17a)(18a)に漠然とした空間を表す造格の例を，(16b)(17b)(18b) に限定された空間を表す与位格の例を示す。

(16) a Би байшнгийн хонгил-оор гүйлээ.
私 廊下-造格 走った
「私は廊下を走った」

b Анги-д-аа биттий гүй.
教室-与位格-再帰 禁止 走れ
「教室で走るな」

(17) a Би энэ зам-аар алхаад галт тэргэний буудал-д очсон.
私 この道-造格 歩いて 駅-与位格 行った
「私はこの道を歩いて駅に行った」

b Тэр босоод өрөөн-д-өө алхсан.
彼 立って 部屋-与位格-再帰 歩いた
「彼は立ち上がり，部屋を歩いた」

(18) a Нялх хүүхэд шал-аар мөлхсөн.
赤ん坊 床-造格 這った
「赤ん坊が床を這った」

b Анги-д-аа мөлхөж болохгүй.
教室-与位格-再帰 這っては いけない
「教室で這ってはいけません」

上の例では漠然とした空間を表す名詞が造格と結びつき，狭い空間を表す名詞は与位格と結びついている。しかし，漠然とした空間の一部分を取り出し，限定的な空間として捉えれば，(19)のように造格と結びついていた名詞は与位格と結びつくようになる。

(19) Би зам-д-аа заримдаа алхаад заримдаа гүйсэн.
私 道-与位格-再帰 時々 歩いて 時々 走った
「私は道中途中まで歩いて，途中から走った」

移動様態を表す動詞のなかには，常に，与位格をとるものもある。水中での移動様態を表す(20)の сэл-「泳ぐ」がそうである。

(20) Бат усан сан/мөрөн /далай-д сэлсэн.
バト プール/河/海-与位格 泳いだ
「バトはプール/河/海で泳いだ」

泳ぐという水中での移動行為は，モンゴル人に馴染みの薄いものである。モンゴル人は，泳ぐという移動行為を狭い空間での移動としか捉えていないようである。

次に，旅行を表す動詞をみよう。жуулчил-「(外国などを)旅行する」は，(21)(22)のように旅行地に造格か与位格を取るが，個別化が行われず旅行地が複数となると，(22)のように与位格は非常にくだけた表現として文法性が低くなる。これは，複数の場合，いろいろな場所に行くということからしい。そして，このような動詞になると，造格に道具的な色彩はほとんど感じられなくなっている。

(21) Нямбуу ирэх жил Япон-оор/д жуулчилна.
ニャンボー 来年 日本-造格/与位格 旅行する
「ニャンボーは来年日本を旅行する」

(22) Нямбуу ирэх жил гадаад орн-ууд-аар/?д жуулчилна.
ニャンボー 来年 外国-複数-造格/与位格 旅行する
「ニャンボーは来年多くの場所を旅行する」

ちなみに，世界旅行には地球を一周するため先述の тойр-「廻る」が用いられ，дэлхий「世界」とは対格を介して結びつく。

また，こうした状況は同様に旅行を表す аял-「(草原などを)旅行する」にも多かれ少なかれいえる。(23)のように旅行地が個別化されると造格と与位格両方が取れるが，そう

ではない場合には(24)(25)のように造格を規範とし，与位格は非常にくだけた口語として文法性の低い表現となる。造格を規範する理由は，(22)の場合と同様に，モンゴル人にとって「草原」や「平原」を「旅行する」(аял-)というのはここかしこに行くという意識が働くためである。

(23) Дорж Архангай-гаар/д аялсан.
ドルジ アルハンガイ-造格/与位格 旅行した
「ドルジはアルハンガイを旅行した」

(24) Дорж хөдөө-гөөр/?д аялсан.
ドルジ 草原-造格/与位格 旅行した
「ドルジは草原を旅行した」

(25) Дорж хээл тал-аар/?д аялсан.
ドルジ 平原-造格 旅行した
「ドルジは平原を旅行した」

## 3．到達点指向性及び起点指向性移動動詞の経路

移動動詞の経路が，到達点指向性移動動詞や起点指向性移動動詞でも表されることは先に述べたとおりである。

まず，到達点指向性移動動詞の経路をみよう。到達点指向性移動動詞は到達点に焦点を置いた動詞であり，到達点までの空間的経由地を経路として表す。到達点指向性移動動詞の例として，(26)－(28)に оч-「行く(着いた)」，ир-「来る」，ор-「入る」を順に掲げておこう。経路は造格で表され，動詞の語義のなかに含まれることはない。

(26) Эрдэнэ энэ зам-аар номын сан-д очсон.
エルデネ この 道-造格 図書館-与位格 行った
「エルデネはこの道を通って図書館へ行った(着いた)」

(27) Эрдэнэ тэр зам-аар номын сан-д ирсэн.
エルデネ その 道-造格 図書館-与位格 来た
「エルデネはその道を通って図書館へ来た」

(28) Муур хаалганы завср-аар өрөөн-д орсон.
猫 ドアの 隙間-造格 部屋-与位格 入った
「猫がドアの隙間を通って部屋に入った」

ここでの造格は，造格が本来もつ造具的な色彩が経路指向性移動動詞の場合よりも強く，

その経路を使ってという意味を強く伴うようである。すなわち，到達点指向性移動動詞では経路が単なる漠然とした空間としてではなく，より一層道具的に捉えられていることになる。

ところで，яв-「行く(向かった)」は先述の通り非目標性動詞であり，到達点を表さない。そのためであろう，ある特別な状況の下でのみ経路が(29)のように与位格で表されることがある。その特別な状況というのは，たとえば船に乗っている人が陸上にいる人に電話で「今海の上を行っている」と，発話時の出来事を進行形の形で伝える場合である。もちろん，この場合も造格をとることはできる。

(29) Би одоо далай-д/гаар Япон явж байна.
私 今 海-与位格/造格 日本 行っている
「私は今海で日本に行っています」

ところが，(29)と同じような状況，たとえば車に乗っている人が車から携帯電話で他の場所にいる人に話すという状況を設定しても，(30)のように(26)などと並んで造格が現れるだけである。

(30) Би одоо зам-*д/аар хот руу явж байна.
私 今 道路/与位格-造格 町 方向格 行っています
「私は今道路を町へ行っています」

広大な海のなかでは発話時の進行距離が非常に少ないと感じられるために与位格が用いられ，道路上ではそのような感覚が伴わないために造格が用いられるのかもしれない。モンゴル語は，сэл-「泳ぐ」もそうであったが，海が関わるとどうも特別な構文を取るようである。

次に，起点指向性移動動詞の経路をみよう。起点指向性移動動詞は起点に焦点を置く動詞であるが，到達点を取ることもでき，その間の空間経由地が先と同様に経路を表す。その例として гар-「出る」を取り上げてみよう。(31)(32)のように経路は造格で表される。

(31) Муур хаалганы завср-аар өрөөн-өөс байшнгийн хонгил руу гарсан.
猫 ドアの 隙間-造格 部屋-奪格 廊下 方向格 出た
「猫がドアの隙間を通って部屋から廊下に出た」

(32) Би энэ зам-аар уулын орой-д гарсан.
私 この道-造格 山頂-与位格 出た

「私はこの道を通って山頂に出た」

гар-「出る」が語義のなかに経路を含んでいないことは，(33)をみればより鮮明となる。

(33) a　Би　гүүр-ээр　гарсан.
私　橋-造格　出た
「私は橋を渡った」

b　Би　гүүр-ийг　туулсан.
私　橋-対格　通り抜けた
「私は橋を渡った」

ただし гар-「出る」の前に хөндлөн「横に」を置き，хөндлөн гар-「横切る」という熟語をつくると，そこに経路が取り込まれることになる。その結果として，хөндлөн гар-「横切る」には гар-「出る」にはない通過の要素が取り込まれ(34)のように名詞とは対格を介して結びつくようになる。

(34)　Та　энэ　зам-ыг　хөндлөн　гараарай.
あなた　この　道-対格　横に　出てください
「あなたはこの道を渡ってください」

## 4．おわりにかえて －経路の格標示における若干の考察－

以上，モンゴル語が経路をどのように表しているのかみてきた。この節では，前節までに述べてきた格の現れについて，若干の考察を行っておきたい。

モンゴル語の経路指向性移動動詞は，その語義のなかに全面的な移動を含むとき，名詞と対格を介して結ばれる。対格が選ばれた理由は，説明されなければならない。他動性の原型(prototype)からみると，対格は通言語的に動作主が被動者を完全に支配することを示す格であるが，この点モンゴル語も例外ではない。原型的な他動詞 ал-「殺す」は(35)のように対格を取るが，原型的な他動詞からかなり離れた уулз-「会う」は(36)のように共同格を取り対格は取らない。

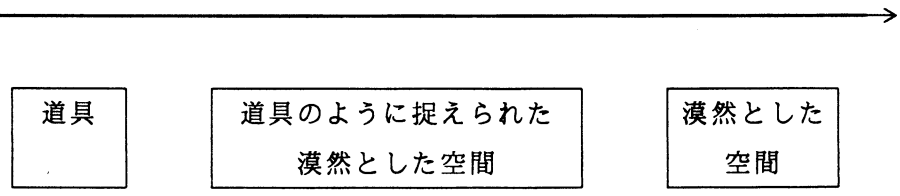
(35)　Дорж　Туяа-г　алсан.
ドルジ　トヤー-対格　殺した
「ドルジがトヤーを殺した」

(36)　Дорж　Туяа-тай　уулзсан.
ドルジ　トヤー-共同格　会った
「ドルジがトヤーと会った」

モンゴル語の経路指向性移動動詞のなかで，語義のなかに全面的な移動を含むものだけが対格を取るのは，経路自体に何か変化を与えるということはないが，経路を全面的に移動するの全面的という点に多少なりとも他動性の原型が反映され，対格が現れる理由となっているのであろう。

ところで，与位格はモンゴル語において動作が行われる場所を表すため，経路指向性移動動詞で狭い空間を経路として表すことは不思議ではないが，道具を元来表す造格が経路を表すのはなぜだろうか。経路指向性移動動詞で経路を表す造格に造格本来の道具の意味は乏しいか動詞によっては認め難いといっても過言ではないが，到達点指向性移動動詞や起点指向性移動動詞で経路を表す造格には造格本来の道具としての色彩が色濃く残っている。この違いは，前者が単なる通り道であるのに対して，後者は通り道がある場所に行くための空間的経由地であるという差に求められるであろう。そして，造格がこのような異なる状況の下で共に用いられる理由については，モンゴル語の造格が使用される意味領域にたとえば(37)のような連続体を想定すれば理解しやすくなる。

(37)




上の連続体は，右に向かうにつれ，造格の原型から離れていくことを示すものである。すなわち，概略的に述べるなら，モンゴル語の場合漠然とした空間が造格の原型である道具のように捉えられているのが到達点指向性移動動詞や起点指向性移動動詞で経路を表す造格であり，その道具のように捉えられた漠然とした空間から道具の要素が薄くなったり，脱落したのが経路指向性移動動詞で経路を表す造格となるのではないだろうか。

＊本稿の作成に際して，モンゴル語のインフォーマントを務めてくださった Ц. Баяраа 氏（広島大学教員研修留学生）に記して感謝を申し上げたい。

## 註

1）詳細は，橋本勝監修・谷博之編(1993)『モンゴル文法・講読』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を参照されたい。